

大塚商会の販売最前線からお届けするセールスノウハウマガジン

BP
business partner

Navigator

2020 Vol. 110

緊急特集

モバイル・テレワークの
松・竹・梅

巻頭インタビュー

株式会社パーソナルデザイン代表取締役
学術博士(コミュニケーション学)

唐澤 理恵氏

Webでの会議や商談に役立つ
パーソナルデザイン術

CONTENTS

巻頭インタビュー

- 8 株式会社パーソナルデザイン 代表取締役
学術博士(コミュニケーション学)
唐澤 理恵氏
Webでの会議や商談に役立つ
パーソナルデザイン術

ITソリューション

- 14 緊急特集
モバイル・テレワークの
松・竹・梅
- 30 モビリティビジネス Starter Book(スターターブック)
Web会議から見るモバイル回線事情
500Kbpsの中速データ通信プランはどの程度、使えるのか?
- 50 くらうどーる 連載
Microsoft Teamsでビデオ会議や
オンラインイベントを開催しよう
- 56 CAD情報
ONE TEAM EXTENSION JAPAN 2020レポート
苦境を乗り越え「もう誰にも止められない」
オートデスクが目指す未来の形
- 58 CAD情報
オートデスク株式会社
AutoCAD 2021とAutoCAD LT 2021をリリース
7つの業種別ツールセットで作業時間を短縮!



BP Navi Value

- 36 PC・周辺機器修理
不慮の事故で読めなくなったデータも復旧できる
見積もり料金不要の完全成功報酬型データ復旧サービス
- 38 サプライビジネス
お勧め商材を厳選した「快適ベストセレクション」が
リリースされました!
- 40 パートナー様のビジネスに付加価値をプラス
One Stop & Value Added

製品情報

64 BP SELECTION -セレクション-

その他

- 77 BP Navigator Back Number/AD Index

第55回

ニッポンの
BP TOP INTERVIEW

元気人

各界の最前線で活躍する
オピニオンリーダーに
IT業界復活のヒントを聞く

唐澤 理恵氏

株式会社パーソナルデザイン
代表取締役
学術博士(コミュニケーション学)

Webでの会議や商談に役立つ パーソナルデザイン術

新型コロナウイルスの感染拡大とともに、Web会議システムなどを活用し、リモートでミーティングやプレゼンテーション、商談などを行う機会が増えている。そこで気になるのが、画面に映る自分の姿が相手にどんな印象を与えているのかということだ。どうすればリモートでも相手に好印象を与え、ビジネスの成功に結び付けることができるのか。イメージコンサルティングの草分けとして、自分の内面的な特性を見据え、外見の表現に反映していく「パーソナルデザイン」を提唱する唐澤理恵さんに聞いた。

「見た目」を「内面」に合わせて 第一印象のギャップを埋める

BP:新型コロナウイルスの感染拡大とともに国や企業がリモートワークを推進したことで、Webによる会議や打ち合わせ、商談などが日常化しています。

唐澤さんは、ありのままの自分をデザインし、表現する「パーソナルデザイン」を提唱しておられますが、その前提となる「自分の見え方」は、対面とWebでは、どれほど違うものなのでしょうか。

唐澤理恵氏(以下、唐澤氏):まず、最も大きな違いは、対面では全身が見えるのに、Webではバストアップ(胸から上)しか見えないことです。

些細なことだと思うかもしれませんが

が、背が高いとか、小柄だとか、恰幅がいいとか、華奢といった体格や体形は、相手の自分に対する印象にかなり大きな影響を与えるものです。

わたしたち人間は、初めて会う人はまず、第一印象で「こんな人ではないだろうか?」と推理します。体格や体形が見えないということは、その判断材料が制限されてしまうわけです。

言い換えれば、Webによる対話では相手の視線は顔だけに集中するので、表情や髪型などを工夫するだけで、自分をパーソナルデザインし、第一印象をよくすることができます。

BP:基本的な質問ですが、第一印象は商談や交渉にどれほど影響を与えるものなのでしょうか。

唐澤氏:わかりやすく言えば、第一印象とは、相手に対する“期待”です。

柔和な表情の人であれば、心もやさしいのだろうと期待するでしょうし、険しい表情なら、「厳しそうな人だ。タフな交渉になるかもしれないな」と、つい身構えてしまうはずで。

いずれにしても、第一印象と実際の人格や性格が一致していれば、それに合わせて表情をうかがいながら言葉を選び、会話を進めていけばいいので、さほどの苦勞はありません。

しかし、実際に話してみると、顔はやさしそうだけど案外厳しい方や、怖そうな顔をしているのに、心はとてもやさしい方もいらっしゃいます。

よくも悪くも、第一印象で抱いた期

第一印象とは、相手に対する“期待”です。

相手に迷いを与えないような第一印象をデザインすることが大切です。

待を裏切られるわけです。

このように第一印象と実際の人格や性格が異なる人は、「どう接すればいいのか?」と迷ってしまうので、奥深いコミュニケーションが取れるようになるまでに時間がかかってしまいます。

プライベートなら、じっくり時間をかけて理解し合うこともできますが、商談や交渉といったビジネスの時間は限られています。

しかも、対面ではなくWebで対話するとなれば、ますます時間の制約が大きくなるはずで。

その限られた時間の中で、奥深いコミュニケーションまで行き着かせ、商談や交渉を成功させるためには、相手に迷いを与えないような第一印象をデザ

インすることが大切なのです。

BP:具体的には、どのようにすればいいのでしょうか。

唐澤氏:わたしが提唱するパーソナルデザインの基本は、自分の「見た目」を「内面」に合わせることです。

見た目が内面そのままであれば、相手は第一印象で抱いた期待を裏切られることがないので、コミュニケーションを効率よく進められます。

逆に、無理をして内面にそぐわない見た目を作ると、自分からコミュニケーションを長引かせてしまうことにもなりかねません。

BP:「名は体を表す」とか、「形から入って心に至る」といったことわざもあるように、外側からのアプローチによって

内面を変える方法もあるかと思いますが、そうではなく、内面に合わせて見た目を変えるわけですね。

唐澤氏:はい。やさしい人なら、そのやさしさがストレートに表れる表情を、健康的ではつつとした人なら、その明るさや快活さが素直に伝わるような表情をつくるのが大切です。

もちろん、外側からのアプローチによって内面が変わることもあります、それには相当な時間がかかります。

相手は、あなたの長い一生の中から切り取られたわずかな時間に会うわけですから、その瞬間に見た外見が内面とあまりにも食い違っていると、戸惑いを感じてしまうのです。

また、外見と内面があまりにもかけ

離れていると、相手に奇異な印象を抱かせてしまうこともあります。

例えば、本当は気の弱い人なのに、無理をして勇ましい髪型やファッションをしていると、見ていて痛々しく感じてしまうことがありますよね。

株式会社パーソナルデザイン
代表取締役
学術博士(コミュニケーション学)

唐澤 理恵氏
KARASAWA RIE



◎ Profile

イメージコンサルティングの草分けとして、多くのビジネスパーソンへのヘアスタイル、服装、話し方などの自己表現を指南、その変貌ぶりに定評がある。記者発表・記者会見における企業トップのメディアトレーニングの実績多数。また、多くの企業や団体で経営者・管理職、広報および営業社員を対象にした自己表現研修を実施する傍ら、早稲田大学・九州大学・お茶の水女子大学・桐朋学園など多くの大学で非常勤講師も務めた。2011年より非言語コミュニケーションの視点から、パワーハラスメント・セクシャルハラスメント防止研修、および管理職層のマネジメントおよびコミュニケーショントレーニングも手掛ける。2008年東京・港区の赤坂サカスに「働く男のための身だしなみ空間 PDS パーソナルデザインスタジオ」をオープン。新宿伊勢丹メンズ館においても同サービスを8年に渡り提供した。TV・雑誌・新聞などで話題を呼び、メディア出演多数。

そうした戸惑いや違和感をなるべく小さくして、スムーズに商談や交渉を進めるためには、内面に合わせて見た目を変えていくことが早道なのです。

「目」と「まゆ」をしっかりと出し 余分な装飾は省く

BP:では、どうすれば内面にふさわしい見た目をデザインすることができるのでしょうか?

唐澤氏:まずは、自分の内面をしっかりと見つめ直すことです。自分の能力や性格、考え方、好みなどを徹底的に分析し、内面の棚卸をするのです。

次に、棚卸した内面に合わせて、それをストレートに表現できる見た目づくりを行います。

Webによる対話であれば、胸から上が印象を与える要素になるわけですから、顔や髪型などの印象を作ることがポイントです。

その中でも、最も大切なのは、やはり顔の印象です。画面に映ると、まずは顔に目線がいくわけですから。

顔の中で、自分の内面を最も表すものは「目」、次に「まゆ」です。

目の表情は、その人の意思を表し、まゆの動きは感情を表現します。つまり、この2つは内面のあり様がストレートに表れるパーツなのです。

ですから、眼鏡をかけている方は、目やまゆがあまり隠れず、しっかり見えるような眼鏡をかけるのが望ましいと思います。髪を垂らして、目やまゆが見えにくくするのも避けたいですね。

眼鏡のデザインにも気を配りたいところです。例えば、縁のとがった眼鏡をかけると、意志が強そうな印象を与えますが、心のやさしい人や気の弱い

人がこれをかけると、内面と見た目のギャップが大きくなりすぎてしまいます。やさしい人なら、むしろそのやさしさを強調できる丸眼鏡などがお勧めかもしれません。

いずれにしても、目とまゆをしっかりと出すこと。そして余分な装飾はなるべく排除することが大切です。

BP:顔のほかのパーツについては、いかがでしょうか。

唐澤氏:話をしたり、食事をしたりするための「口」は、その人の品格を映し出すとされています。また、「鼻」は呼吸をするための器官なので、小鼻の大きな人は生命力の強さを、小さな人は品性を感じさせます。

新型コロナへの感染防止のためマスクを着用する方が増えていますが、当面は気にする必要はありませんが、今後感染が収束し、マスクを外して対面するようなことがあっても、「印象が違った」と思われぬように、口や鼻の表情にも気を配りたいものです。

BP:ほかに、Webによる会議や商談、交渉で気をつけなければならない点は何でしょうか。

唐澤氏:対面では、相手の目を見て話しますが、Webでは画面に映った相手の目を見ると、目線が少しズレてしまいます。なるべくカメラを見て話すようにするといいでしょう。

また、背景がごちゃごちゃしていると、それに目を奪われて表情を注視できなくなるので、なるべくシンプルな背景を選んだほうがいいと思います。

Zoomなど一部のWeb会議システムには、背景を自由に設定できる機能が付いているので、それを活用してシンプルな背景にするのもいいかもしれません。

また、背景が明る過ぎると、顔の表情がよく見えなくなるので、なるべく抑えた色調にするのがお勧めです。

BP: 服装は、どのような点に気を配ればいいでしょうか。

唐澤氏: 顔の表情を生き生きとさせるには、白いシャツを着用するのがお勧めです。白のシャツにダークのスーツを合わせると、メリハリが利いて、仕事のできる印象を与えます。

逆に、グレーのシャツやジャケットを着用すると、ぼんやりとした印象を与えてしまうので、あまりお勧めできません。

画面に映る自分の姿を見て表情や仕草を修正する

BP: 光の当て方によっても、顔の印象は変わりそうですね。

唐澤氏: 上のほうから光を当てると、目の下にクマのような影ができてしまいますし、下から光を当てるとお化けになってしまいます。

なるべく正面に近い位置から光を当てるようにしたいですね。

ご指摘のように、顔の印象は光の当て方によって大きく変わります。

特に際立つのが肌の印象です。あまり光を当て過ぎるのはよくありませんが、かといって暗すぎると不健康な肌に見えてしまいます。

肌が輝いている人は、健康で幸せそうに見えるものですし、健康は幸運のイメージにも結び付きます。お客さまは、見た目が健康で幸運そうな人と取引したいと思うものですから、肌の印象をよくすることはとても大事です。

男性で肌に自信のない方は、毎日化粧水をつけてお手入れをしてみるといいと思いますよ。

BP: Webでは、相手の画面に「自分がどう映っているのか?」というのが非常に気になる場所ですね。

唐澤氏: 実は、それを自分の画面でも確かめられるのが、Webのいいところなのです。

リアルな対面の場合は、自分がどのように見えているのかを確かめることはできませんが、Webなら、画面に映った自分の表情や仕草を客観的に眺めることができます。

表情や仕草に問題があるなら、その場で修正を図ることができますし、眼鏡や髪型、メイクがいまいちだと思えば、次から変えればいいのです。録画をして、後から見直してみるのもいいでしょう。

ただし、ここで注意したいのは、自分側の画面に映る自分の姿は、鏡映しになっていることがあります。実際の姿と鏡写しの姿は、一見同じようでも、かなり印象が異なります。

ソフトによっては、簡単にミラーリングを変えられることもできますが、できない場合は、対話用、モニター用と2つの端末を用意して会議や商談に参加してみてもどうでしょう。モニター用の端末には、鏡写しではない、実際の姿が映し出されます。左右逆写しの自分の違いに新たな発見があるかもしれません。もちろん、ほかの参加者の了承を得たうえで話ですが。

BP: 最後に本誌読者にメッセージをお願いします。

唐澤氏: 残念ながら、日本には自分の見た目を客観視できるビジネスパーソンがあまりいらっしゃいません。

自分を客観視できれば、相手との距離を程よく取れるようになるので、おのずとソーシャルディスタンス(社会的距離)が保たれ、パワハラなどの問題も減るはず。こんな時代だからこそ、ぜひ心掛けてみてください。BP





緊急特集!

モバイル・テレワークの 松・竹・梅

新型コロナウイルスの感染拡大は、これまでの企業活動を根底から覆そうとしている。日本では、外出の自粛要請により、なかば強制的にモバイル・テレワークへの移行が行われている。備えのない企業は、休業を余儀なくされ、将来的には廃業の危機が迫っているのだ。そこで業務を止めないモバイル・テレワークを実践するためには何が必要なのかを松・竹・梅のプランで考えてみたい。感染拡大が終息したとしても、モバイル・テレワークは、今後備えておくべき課題と言える。パートナー様には、将来の事業継続を見据えた提案が求められている。



① 接続方法

セキュアな接続にはVPNが不可欠 まずはその仕組みを再確認しておこう

モバイル・テレワークの提案において、まず検討したいのが社内システムへのセキュアな接続方法の確立だ。手軽な導入プランとしてVPN(Virtual Private Network:仮想専用線)がある。具体的な導入手段にはルーターなどの専用ネットワーク機器を利用するほか、NAS(Network Attached Storage)などの周辺機器の機能を利用する方法がある。

データをカプセル化し 盗聴や不正侵入を防ぐVPN

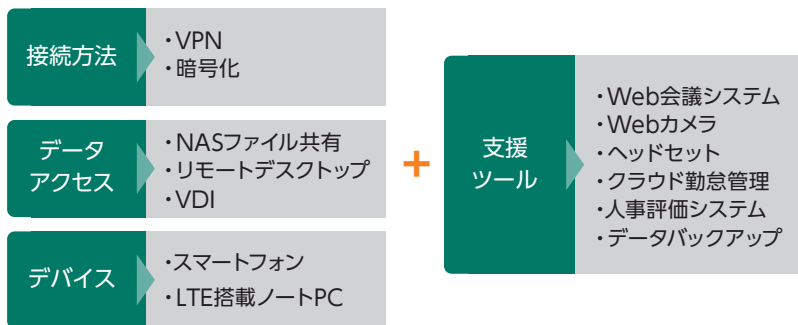
近年、モバイル・テレワーク提案はVPNとリモートデスクトップの組み合わせが一般化している。ところが、あらためてそれぞれの役割を問われると、自信を持って答えるのは意外に難しい。今回はモバイル・テレワーク提案を「接続方法」「データアクセス」「デバイス」という三層のレイヤーに切り分け、まずは、それぞれの役割を再確認したい。そのうえでパートナー様のクロスセル提案の観点からは、クラウド勤怠管理をはじめとする関連商材の提案を視野に入れたい。今回はこの3+1の要素を基本に、モバイル・テレワークを考えてみる。

まずはアクセス手段から考えていこう。極論すれば、手元のPCをインターネット経由で社内ネットワークにつなげれば、即座にオフィスと同様にファイルの共有が可能だ。しかしインターネットなどの公衆網を利用する通信は、データ内容の盗聴や、宛先情報を偽った不正アクセスなどのリスクに直結する。

かつて遠隔地間のデータ通信は、回線を完全に専有する専用線が利用されることが一般的だった。今日でも金融機関や大容量データのやり取りが生じる業態の企業では専用線が利用されているが、この方法は専用線で結ばれた拠点間にしか適用できないうえ、高いコストが必要になってしまう。

この問題を解決するのが、公衆網を

●三層レイヤーから考えるモバイル・テレワーク提案のイメージ



あたかも専用線であるかのように安全に利用することを可能にしたVPNという考え方である。VPNに厳密な定義はないが、基本的には以下の三つの要素から成り立っている。

●トンネリング

通信パケットにはそれぞれ宛先情報が付加されるため、公衆網を利用すれば、それが誰宛てのデータであるかは誰の目にも明らかになる。それに対し、通信パケットを異なるプロトコルによる容器で包み込み、カプセル化することで、仮想的な専用経路を作り出すのがトンネリングの基本的な考え方だ。受け手側のVPN装置は、受信したカプセルから本来の通信パケットを取り出し、本来の宛先にデータを受け渡すことで通信の安全性を担保する。

●暗号化

カプセル化に先立ち、通信内容や宛先は暗号化される。それにより、盗聴されてもデータ内容などの判読は困難になる。暗号化されたデータは受け手

側VPN装置で復号したうえでPC・サーバーに受け渡される。

●認証

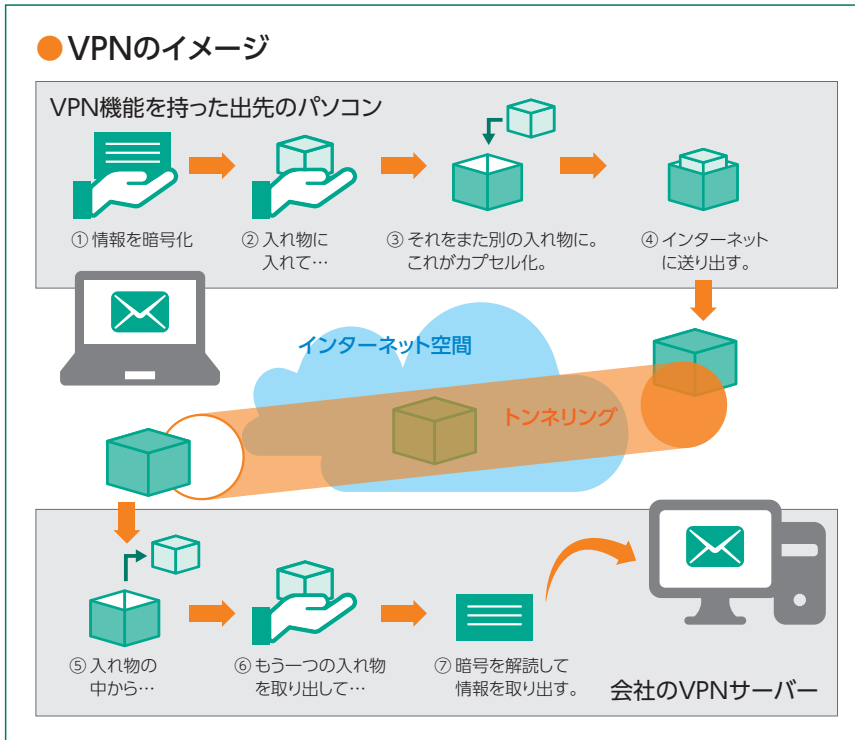
VPNでは、カプセル化されたパケットに認証情報が付け加えられることが一般的だ。それにより、不正アクセスを遮断したセキュアな通信環境が実現する。

公衆網の利用を前提としたインターネットVPNの場合、情報漏えいリスクが完全にゼロになるわけではない。また時間帯によっては、思うような通信速度が得られないという声もある。そのためインターネットVPNのほか、エントリーVPN、IP-VPNなど、接続方法の目的に応じた使い分けも進んでいる。

それらを簡単に整理すると、すべての経路で公衆網を利用するインターネットVPNに対し、通信事業者が提供するIP網への接続のみ公衆網を利用するのがエントリーVPN、すべての経路を専用線で結ぶのがIP-VPNと言える。

これらの中で、モバイル・テレワークの選択肢になるのがインターネットVPN

●VPNのイメージ



とエントリーVPNになる。エントリーVPNは、どこからでも容易にアクセスできるインターネットVPNと、通信キャリアの閉域網を利用することで高度なセキュリティが担保されるIP-VPNの“いいとこ取り”の提案である。ただし、通信速度は閉域網へのアクセス回線の接続状況に左右されるため、それほど速くない。

VPN導入により生まれるセキュリティの新たな視点

次にVPN導入についてより具体的に見ていこう。リモートアクセス側は、既存ブラウザやアプリケーションに実装されたVPN機能を利用することが一般的だ。社内システム側におけるVPN接続の受け皿としての役割はルーター製品が担うことが一般的。さらにファイアウォール機能も備える製品を利用することで、よりセキュアな管理が可能になる。

またVPNの受け皿としての機能を搭載するNAS製品がある。小規模なエンドユーザー様がゼロからモバイル・テレワークを

始めようとする場合、NAS製品の付加機能の活用も選択肢の一つになるはずだ。

ここで注意したいのが、VPN導入によって生まれる新たなセキュリティ対策だ。インターネットVPNやエントリーVPNは、いつでもどこからでも社内システムへのスムーズなアクセスを可能にする。それを言い換えれば、IT管理者の目が届かない端末が社内システムに自由にアクセスできるようになることにはかならない。

例えば、ネットカフェのPCやアンチウイルス対策がされていない端末から

のアクセスは、大きなリスクにつながる。その解決には運用ルール策定に加え、IT資産管理・クライアント運用管理ソフト導入などの対策が求められる。より簡便な方法として、一部のVPNルーター製品が搭載するセキュリティ機能の活用にも注目したい。

リモートアクセス端末のOSバージョンの更新状況などをチェックする「クライアントチェック」(クライアントチェッカー、ホストチェック)、リモートアクセス端末側のキャッシュを接続後に自動的に消去する「キャッシュクリーナー」(キャッシュクリーニング、キャッシュクリーンアップ)などの機能。それらを搭載するルーター製品を選定することで、VPN接続における一定のセキュリティを担保することが可能だ。エンドユーザー様の状況に応じた、適切なセキュリティ対策の提案を行いたい。

そのほかの接続方法では、双方にソフトウェアをインストールする方法やクラウドサービスを介することで、ルーターなどハード製品を利用することなくセキュアな通信を確立する方法もある。独自方式でリモートデスクトップを提供する「RemoteView」などがその代表例で、専用ハードを必要としないことから、比較的小規模なエンドユーザー様の場合、費用対効果で一定のメリットが期待できる。

●主なVPNのタイプ

インターネットVPN	一般のインターネット回線を利用。インターネットにアクセスできれば使えるため、比較的安価に、かつ場所を問わず使える。
エントリーVPN	光回線や携帯電話のLTE回線などのブロードバンド回線をアクセス回線に使い、通信事業者が提供する閉域網に接続。安全性は高まるが、通信品質はインターネットVPNと同等と考えていい。
IP-VPN または広域イーサネット	専用線やイーサネットで閉域網に接続。IPのみを使うIP-VPNとそれ以外のプロトコルを使う広域イーサネットという違いがあるが、通信品質などには大きな違いはない。

② データアクセス

リモートデスクトップの導入は VDI提案も含め検討したい

今後、リモートデスクトップがモバイル・テレワークの主流になる可能性がある。作業の利便性向上だけでなく、既存運用している機器の見直しで、大幅なTCO削減ができるメリットが多いからだ。管理工数の一層の省力化という観点では、リモートデスクトップの先にあるVDI (Virtual Desktop Infrastructure: 仮想デスクトップ) という選択肢もある。

モバイル側のスペックを問わずスムーズな操作が可能

NASの機能を活用して保存ファイルを共有し運用する方法は、最も手軽な方法の一つ。ルーターを利用するVPN接続の仕組みを持たないエンドユーザー様の場合、まずはNASにデータを集約したうえで接続を行うことは、リーズナブルな提案になる。特にWebブラウザを利用するNASへのファイル共有は、セキュリティは低くなるものの、今すぐにリモート業務を行いたいエンドユーザー様への緊急提案として有効だ。

しかしこの方法では、業務システムへのアクセスが難しいなどの問題もある。この問題を解決し、いつでもどこからでもオフィス同様の作業環境を提供するのが、ホストPCのデスクトップ画面をPCなどのモバイル端末に転送し、そこから遠隔操作を行うリモートデスクトップ接続ということになる。Windows OSの場合、Windows XP以降は同機能が実装されている。Windows 10 ProおよびEnterpriseエディションがインストールされたPCであれば、設定画面上でリモートデスクトップとしての設定を行うことで、ホストPCとして運用を開始できる。

リモートデスクトップの第一のメリットは、リモート端末の役割が画面表示とマウス・キー操作に限られるので、そのスペックを問わず、オフィス同様の働き方ができる点にある。そのためインターネットにつながる環境であれば、3次元

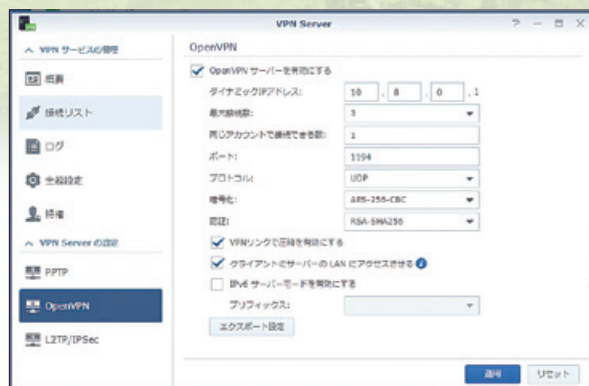
CADや動画ファイルのような大容量データでもリモート端末のスペックを問わず、快適なレスポンスで遠隔操作することが可能になる。

Windows OSの場合、OSエディションを問わずリモート端末として利用できる。また、専用アプリをインストールすれば、AndroidやiOSからも遠隔操作が可能だ。

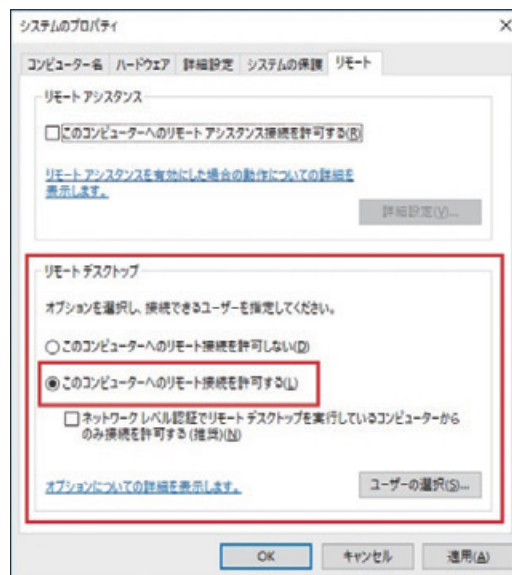
また、リモートデスクトップによる端末やライセンス管理の簡素化も注目したいポイントだ。VPNの項目でも触れたように、モバイル・テレワークでは持ち出し端末のセキュリティ対策は大きな課題の一つだが、在宅勤務時の私物デバイスまで含めると、そのすべてを把握するのは容易なことではない。

特に、オフィス用と持ち出し用の2台のPCを運用するエンドユーザー様の場合、管理の手間も2倍になる。リモートデスクトップであれば、リモート端末側のキッキングは特に必要なく、セキュリティ対策もホストPCに集中して取り組むことで一定の効果が得られる。

さらに、データ持ち運びが不要になることで、端末紛失や盗難による漏え



Synology NASのVPN設定画面。設定は容易に行える。



Windows 10のリモート接続は、接続先PCで接続を許可したうえで、クライアントPCで接続の設定を行う。

いリスクが大幅に軽減できる点もメリットの一つ。設定により、リモート端末からのプリントアウトを抑制するなどの対策を採ることも可能だ。

リモートデスクトップはWindows OSとVPNの組み合わせだけでなく、多様な方法がある。Google Chromeブラウザの拡張機能として提供されるChromeリ

モートデスクトップはその一例で、ホストPCとリモート端末の双方に拡張機能をインストールすることで、VPNを構築することなく一定のセキュリティを担保することが可能だ。さまざまなアプリでも同様のソリューションを企業ニーズに合致した形で提供する製品も数多く、VPN構築が不要で容易に運用が開始できる特長が高く評価されている。

またRemoteViewは、クラウドサービスを通じてホストPC・リモート端末間の通信を行うことで、専用ソフトをインストールしなくてもリモートデスクトップ接続できる。この方法であれば、一層簡単にリモートデスクトップ運用を行うことが可能だ。

VDI提案ではHCIによる管理省力化にも注目したい

リモートデスクトップが端末管理の省力化に貢献することは間違いない。だが、設定作業を一台一台のホストPCに対して行うことを考えると、ドラスティックな効果が期待できるわけではない。

そこで次に注目したいのが、VDI(仮想デスクトップ)を利用したリモートアクセスの提案である。リモートデスクトップもVDIも、一方はPC一台一台にアクセスし、もう一方は仮想化サーバーにアクセスするという違いはあるものの、その仕組みはどちらも画面転送型シンクライアント(リモート端末)の一種と言える。そのため、リモート端末のスペックを問わず快適なレスポンスで操作できるという特長において、双方に大きな違いはない。

VDI提案のメリットとしてまず注目したいのは、管理工数の大幅な省力化にある。物理PCの場合、そのキッティングや各種プログラムのインストール、更新は原則として一台一台個別に対応するほかない。しかしVDIであれば管理画

面を通し、管理者が自席から全従業員のデスクトップ環境を一元管理できることがその理由だ。

また、ITリソース配分の最適化も重要なポイントになるだろう。企業におけるPC選定は、業務システムへの入力から3次元CADの操作や動画の編集まで、業務の負荷に応じて行われることが一般的だ。その結果、台数には余裕があるにもかかわらず、ハイスペックPCを買い

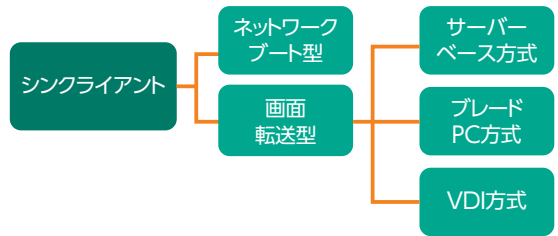
足さざるを得ないという状況が日常的に生じている。仮想化ハイパーバイザー上で仮想マシンを運用するVDIは、こうしたムダを解消し、リソース配分の最適化を図るうえで大きな意味を持つ。

一方でVDI提案には、サイジングをはじめ、仮想化ならではの難しさがあることも否めない。そこで注目したいのが、HCI(ハイパーコンバージド・インフラストラクチャ)の活用だ。

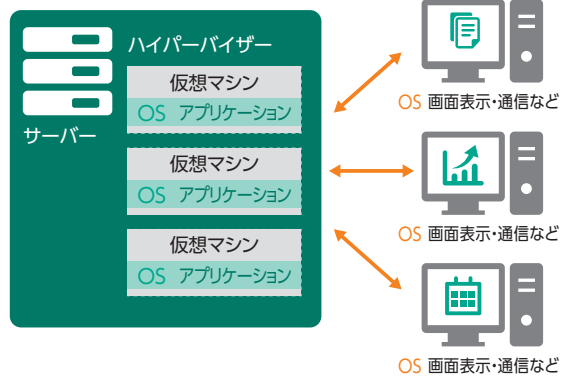
SANスイッチやNASなどの外部スト

レージを利用することなく、x86サーバーに搭載されるSSDやHDDのリソースをソフトウェア機能で統合したHCIは、システム運用状況に応じた構成が容易に組めるだけでなく、事業の拡大に応じ、スケールアウトもスムーズに行うことができる。SANスイッチなど周辺機器の配線が複雑に絡み合うサーバールームの運用に頭を抱える管理者にとって、リソースを統合し、シンプルな構成を実現するHCIは大きな魅力を持つに違いない。

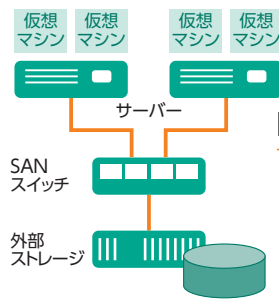
●シンクライアントの種類



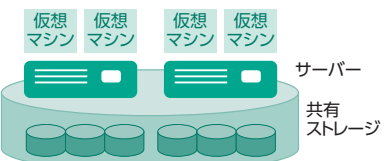
●VDIの考え方



従来の仮想化基盤



ハイパーコンバージド・インフラストラクチャ



Software Defined Storage (SDS)の技術で、サーバーの内蔵ストレージを統合。共有ストレージとして使用

③ デバイスその他

モバイル・テレワーク定着に向けた 勤怠管理などの需要に注目

ここからはモバイルデバイスとモバイル支援ツールについて見ていこう。感染症対策としてモバイル・テレワークを導入したエンドユーザー様は多いが、今後モバイル・テレワークを企業活動の主要な柱の一つに位置づけ、運用していくうえで、就業規則をはじめとする制度を大きく変えることが求められる。その実現に資するIT提案にも注目したい。

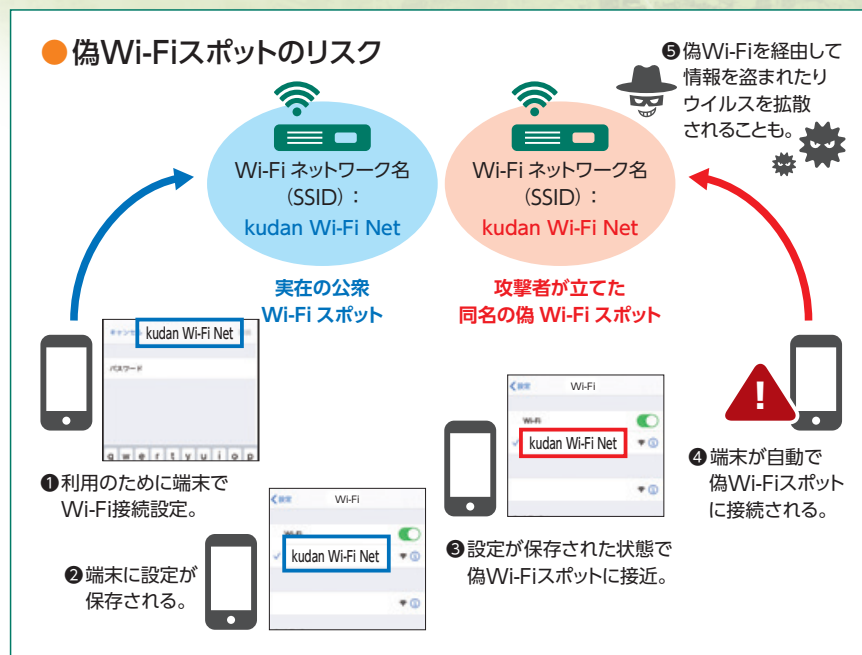
端末で注目したいのは LTE搭載PC

デバイス提案においてまず注目したいのが、LTE搭載PCだ。駅や空港、商業施設などが整備を進める無料Wi-Fiスポットがモバイルワーク普及を下支えしていることは間違いないが、その利用に一定のリスクをとらなう点には注意が必要だ。偽のWi-Fiスポットを立ち上げ、ID、パスワードを抜き取る手口はその一例である。

過去に接続したことのあるWi-Fiネットワークの情報が端末に保存されていると、同じ名前のネットワークの電波圏に入ると端末は自動的にそのネットワークに接続する。その仕組みを悪用することで、攻撃者は実在の公衆Wi-Fiと同名の偽のアクセスポイントを設置するだけで、端末を自動接続させる。

在宅勤務だけでなく、モバイルワーク全般において通信セキュリティを担保する場合、VPN構築だけでは不十分であることは間違いない。さらに、テザリングを利用するなら通信費、モバイルWi-Fiルーターの充電をはじめとする管理の手間などが生じる。

その解決方法として、現在主流になっているのがSIMカードを搭載したLTE対応PCだ。毎月の通信コストはモバイルWi-Fiルーター同様定額制で、通信キャリアが提供するサービスを利用することで閉域網のVPNをリーズ



ナブルに構築することも可能だ。5Gがフルスペックでどこでも使える状況になるのは先の話になることを考えると、安定した通信サービスが利用できるLTE対応PCはまだまだ旬の提案と言える。

VDI提案では、シンクライアント端末にも注目したい。記憶装置を持たないことはデータ漏えいリスク削減だけでなく、軽量化にも貢献する。

今後、モバイル・テレワークを確実に運用していくためには、周辺環境の整備も見落とすことができない課題である。まず注目したいのが多様なコミュニケーション手段の整備だ。モバイル・テレワークでは、データやスケジュールの共有、SNSやWeb会議による情報共有の整備が不可欠になる。

Microsoft Teamsなどを通してそれらの機能をワンパッケージで提供するMicrosoft 365が今後も重要な商材であり続けることは間違いない。一方で、今回の感染症対策の取り組みにおいて普及が進んだのが、コンテンツ共有など多様な機能を提供するWeb会議ツール、Zoomミーティングだった。

Zoomミーティングの大きな利便性の一つが、ホストがオンライン上に開設した会議室のURLを参加者に伝えることで、取引先・協力会社も含め、誰でも会議に参加できる点にある。タブレットに手書きした内容がまるで会議室のホワイトボードのように供給できるなどの無料プランの充実した機能に加え、その特長が感染症対策で面談が制約される状況で、広く受け入れられる

結果につながった。

ただし無料プランの場合、3人以上の1回の会議時間は最長40分に限られる。会議を手早く済ませたいと考えるならその制約も意味を持つが、議題を掘り下げていこうとするなら40分はあまりに短い。そのため有料版への移行を検討するエンドユーザー様も多いと考えられる。クラウド上で会議を録画・録音するなどの有料版ならではの機能の訴求と共に、有料版への移行を提案していきたいところだ。

またZoomミーティングの運用では、“Zoom爆撃”と呼ばれる部外者による会議の妨害や会議内容の漏えいが数多く報告されている。その原因の多くは、オープンSNSによる会議室URLやIDの伝達などの不用意な運用が大部分であると見られる。Zoomミーティングの利便性と表裏一体のリスクに関する啓発が求められる。

新型コロナウイルス感染症対策は、意外なところにも影響を及ぼしている。Webカメラの品薄状態もその一つだ。ノートPCに搭載されるカメラでWeb会議に参加する場合、その映像は、下から仰ぐ形で画面に映し出されることになる。突如巻き起こったWebカメラ需要は、

それを嫌ってのものが見られている。さらに、ヘッドセットも品薄状態が続いている状況だ。現在の状況が一段落したタイミングで、Web会議関連サブ

ライ品の統一化に取り組むエンドユーザー様の動きがあると思われる。

モバイルワーク普及は人事評価の仕組みの再検討にもつながる

モバイルワークを業務の柱の一つと位置づけ、運用されると労務管理や人事評価の見直しは避けて通ることができない課題だ。シンプルに解が割り出せるような課題ではないが、その実現に向け、ITにできることは少なくない。その一例が、クラウド勤怠管理システムの導入である。

スマートフォンのGPS情報と紐づけることで、打刻時刻の所在地まで管理することが可能な同システムは、勤怠管理業務の大幅な効率化にも貢献するだろう。現在、タイムカードで勤怠管理を行うエンドユーザー様にぜひ提案したいソリューションの一つだ。

● Zoomミーティングのライセンス

ライセンス	価格	ミーティングの参加者	ミーティングの時間
基本	無料	最大100名	最長40分
プロ	2,000円 (月/ホスト)	最大100名	最長24時間
ビジネス	2,700円 (月/ホスト)	最大300名	制限なし

また、目の前にいないことが多い部下の人事評価をどう行うかも今後、大きな課題になるだろう。これまで人事評価は、組織への貢献よりもむしろ管理者の主観が反映されやすいなどの課題が指摘されてきた。モバイルワークの定着化を機に、定量評価の導入など、これまでとは異なる人事評価の仕組みづくりに取り組むことが課題となる。多様な評価項目を可視化する人事評価システムは、その取り組みにおいて大きな役割を果たす。

モバイル・テレワークに対応した新たなセキュリティ提案にも注目したい。特に、管理者の目が行き届かないモバイル端末も含めたIT資産管理や、操作・アクセスログ取得の徹底化は重要キーワードになる。また、今回の緊急事態宣言をともなう新型コロナウイルス感染症対策への取り組みは、BCP(事業継続計画)に対

する意識の強化にもつながっている。クラウドを含めた遠隔地へのデータバックアップの構築もあわせて提案したいところだ。

最後に「接続方法」「データアクセス」「デバイス」の3レイヤーに沿って、中小企業へのモバイルワーク導入提案を具体的に考えていきたい。BP

● あわせて提案したいモバイル・テレワーク支援ツール

Web会議システム	Zoomの無料プランはグループミーティングが最長40分という制約がある。今後法人プランを採用するエンドユーザー様は確実に増えるはずだ。
Webカメラ・ヘッドセット	Webカメラをはじめとする、Web会議関連のオフィスサプライにも注目したい。
クラウド勤怠管理	モバイル・テレワーク提案は今後、総務・人事部門が主戦場になる。多くのエンドユーザー様にとって、モバイル・テレワークに対応する勤怠管理は喫緊の課題だ。
人事評価システム	モバイル・テレワーク普及にともない、管理者の主観にとらわれないより客観的な人事評価が求められている。人事評価システムのニーズは確実に高まるはずだ。
IT資産管理ツール	モバイル・テレワークは従業員の不正発見、モバイル端末のセキュリティ管理など新たな課題を生む。
データバックアップ	新型コロナウイルスはBCPの重要性の再認識にもつながった。中でもデータバックアップの確立は、重要な課題になることは間違いない。

梅 プラン

VPN対応NASで リモートアクセスと情報共有を両立

情報共有の仕組み自体が未整備のエンドユーザー様は今も少なくない。その場合、モバイル・テレワークの第一歩として提案したいのが、VPN対応NASによる一石二鳥提案だ。これによりいつ、どこにいても手元の端末で最新情報を共有し、編集・加工することが可能になる。

① 接続方法 NAS製品の VPN機能を 活用

Pint
01

VPNルーターなしに セキュアな通信を実現

VPN機能を実装するNAS製品も多い。その機能を活用することで専用ルーターを導入することなくVPNが構築できる。ルーターなどの専用ハードを使わない接続手段にはそのほか、サードパーティのリモートデスクトップ製品による方法もある。ホストPCとリモート端末の双方にソフトをインストールする方法やクラウドサービスを通じた接続により、VPN同様セキュアなデータ通信を可能にするこの方法は、小規模なエンドユーザー様であれば費用対効果の観点でも有効だ。

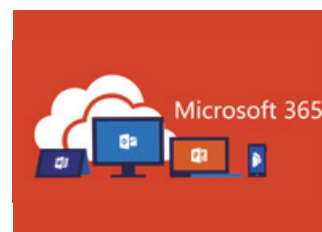


② データ アクセス NAS

Pint
02

オンプレとクラウドで業務を よりスムーズに

企業内の情報をクラウドで管理することに抵抗感を持つエンドユーザー様も多い。モバイル・テレワークという観点では、重要情報をNASで管理する一方、コミュニケーションツールとしてクラウドを活用していくことが望ましい。例えばMicrosoft 365ライセンスの支給で多様なコミュニケーション・情報共有手段が確保される。

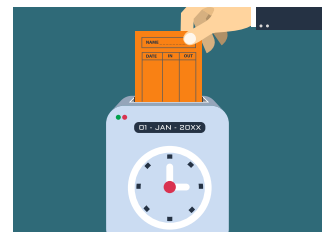


③ デバイス スマートフォン・ ノートPC

Pint
03

クラウド勤怠管理システムの クロスセル

モバイル・テレワークにおいて勤怠管理を課題に挙げるエンドユーザー様も多い。スマートフォンからも打刻でき、GPS情報と紐づいた勤怠管理が可能になるクラウド勤怠管理システムは、タイムカードなどによる方法と比べて集計作業が大幅に省力化されることもあり、あわせて提案しやすい商材になる。



竹 プラン

リモートデスクトップで 社内同様の作業環境を実現



リモートデスクトップを活用すれば、業務システムへのアクセスや3次元CADの操作もオフィス同様に行うことが可能になる。またLTE搭載ノートPCにより、いつでもどこからでも、VPNによる社内システムへのセキュアな接続が実現する。

①

接続方法

専用ルーターによるVPN構築

Pint
01

ファイアウォールと共に アクセスを一元管理

VPNとファイアウォールを兼ね備えるルーターを選定することで、アクセス環境の効率的な管理が実現する。またVPN対応ルーターには、モバイル端末のセキュリティ対応状況をチェックでき、接続後にデータを強制的に消去する機能を備える製品もある。端末を含めたセキュリティ向上を図るうえでは、そうした機能も検討したい。



②

データ アクセス

リモート
デスクトップ

Pint
02

リモートデスクトップで オフィス同様の環境を実現

Windows 10の場合、Pro、Enterpriseエディションをインストール済みの端末であれば、簡単な設定により、ホストPCとして運用を開始できる。また専用アプリをインストールすることで、AndroidやiOS端末もリモート端末として利用できる。



③

デバイス

LTE対応
ノートPC

Pint
03

LTEでどこからも セキュアなアクセス

在宅勤務だけでなく、モバイルワーク全般を前提にするなら、出先からのアクセスも重要な課題の一つ。LTE対応ノートPCであれば、どこからでもセキュアなアクセスを可能にする。あわせてエントリーVPNなど通信キャリアの閉域網を使ったプランの利用も検討したい。



松 プラン

HCIでVDIを運用。システム管理も含め「いつ、どこからでも」を実現

危機管理は、最悪の事態を想定して行うことが重要だ。モバイル・テレワークの仕組みづくりも本来、そうした観点から取り組む必要があるだろう。そこで浮上するのが、HCIによるVDI運用提案だ。ある日突然、出社できなくなる状況でも、手元の端末でオフィス同様の仕事環境が得られ、トラブルにも管理画面上でリモート対応できるHCI+VDI提案は、まさに盤石の提案と言える。

① 接続方法

VPN

Pint
01

HCI+VDIで盤石の モバイル・テレワーク対応

TCOの観点から考えると、モバイル・テレワークのIT基盤はシンクライアント方式への移行が望ましい。だが、近年シンクライアントの主流となったVDIには、仮想化システムのサイジングの難しさという課題がある。その解決に大きな役割を果たしているのが、スケールアウトが容易なHCIだ。複数の宿主PCに接続するリモートデスクトップと違い、管理者がリモートで運用を一元管理できる特長は、管理の省力化だけでなく、BCPの観点でも重要なメリットだ。



② データ アクセス

HCI + VDI

Pint
02

シンクライアント端末で セキュリティを向上

リモートデスクトップ・VDIの運用においてぜひ注目したいのが、ハードディスクなどの記録装置を持たないシンクライアント端末の活用だ。盗難や紛失によるデータ漏えいやセキュアなネットワーク環境の維持だけでなく、軽量化によるモビリティ向上という観点でも大きな効果が期待できる。



③ デバイス LTE対応 シンクライアント 端末

Pint
03

BCPと合わせた提案も効果的

リモートワークとBCPの複合提案でぜひ注目したいのが、データ保全という観点だ。遠隔地に拠点を持つエンドユーザー様の場合、拠点間バックアップ体制構築が第一の選択肢になるが、拠点を持たない場合はクラウドを活用した効果的なバックアップ提案を行いたい。

